

# 計画・交通研究会

Association for Planning and Transportation Studies

## 会報 2009-9

発行日：平成21年10月1日

発行元：（社）計画・交通研究会

### 目次

Opinion .....1  
次の時代に何を残すのか？

News Letters .....2-5  
事業報告・活動報告

Backyard .....6  
事務局通信

## □ Opinion 次の時代に何を残すのか？ 日本大学 岸井隆幸

### <社会の変化>

今や我国は世界に誇る長寿国である。男性の平均寿命は79.3歳、女性にいたっては86.1歳である。(2008年厚生労働省) 高度成長が始まる1960年には、男性が65.3歳、女性が70.2歳でしかなかったから、わずか50年足らずで人生は1.2倍強 ( $79.3/65.3=1.21$ ,  $86.1/70.2=1.23$ ) に延伸したことになる。

内訳を見ると、人格形成期である義務教育は9年、これは変わっていない。ところがその先の高等教育をみると、1960年当時の高校進学率は51.8% (通信制課程・定時制を除く) であったが、現在はほぼ全入の96.4%。そして大学・短大への進学率 (通信教育部を除く) は1960年が17.2%で、現在は52.8%である。1960年の全日制高校入学率と現在の大学入学率はほぼ等しく、かつて15歳で就職か、進学かを選んでいたので、今は18歳で選ぶようになったと考えることができる。まさに、人生1.2倍延伸に対応している。

次に社会の構成をみてみよう。人口を5歳階層別に区分して、人数の多い階層から順次加算していった累計で50%を超えるところ、いわば多数派層を探してみる。1960年では最多数階層が10-14歳で、5-29歳まででほぼ半数となる。つまり、若い世帯と成長期の世帯の子供で社会の多数派が形成されていた。(確かに3人から5人で構成されている世帯は全体の45.4%であった) 一方、2005年では55-59歳が最多数階層で、25-69歳の合計で過半数となる。今、多数派を構成するためには多くの年齢階層

を結ぶしかない。また、世帯構成をみると単身世帯が30%弱、構成員2人までの世帯が56%で、すでにサザエさんの磯野家やののちゃんちゃんの山田家のような世帯は多数派とは言えない。

結局、この成長の50年間を経て、日本社会では人生が概ね1.2倍に間延びし、世帯という最小の社会集団の結合力が弱まり、様々な属性をもつ個体の分離が進んでいる、ということになる。こうした社会で政策の合意形成を図ることは容易ではない。1960年当時は「成長世帯の幸福を目指す」ことが「最大多数の最大幸福への道」に近いことは明白であったが、今では年金、子育て、雇用確保と自ずと各年齢階層に様々な政策をばら撒くことになる。

焦点が絞れない困難な時代である。

### <次の時代へ>

そして、この分散化した社会構成も変化を遂げて行く。20年後の2030年には、(人口問題研究所が発表している中位推計によれば、という前提つきではあるが) 55-59歳が最多数の階層となり、45-84歳、いわば「子育てから解放された成熟自由人」が多数派を形成することになる。今の「ばら撒き」の次、政治は自ずと「成熟世代」志向へと向かうこととなる。その時も世帯構成が小規模なものである (人口問題研究所推計では単身世帯が37.5%、夫婦だけが19.2%) ことは変わらない。

この「成熟自由人」の生きざまをどう考えればよいのだろうか。当然、「健康や福祉」は大きな関心事である。また、小規模世帯である以

上、量より質が重視されるし、やがて単独世帯へと移行することを考えれば「群れ=社会」によるサポートも必要性が増すであろう。一方で自らの生きる価値を再構築する動き（「新たな18歳」の選択）も活発になると思われる。

そして、社会にとっては、この「成熟自由人」に社会を安定させる知恵と生を継承させたいという大きなエネルギーが秘められている、とい

うことが重要である。成熟した多数派であるからこそ少数派「次の世代」の大切さも理解できる可能性が高い。

成熟世代が大切に保存している知恵と次世代に引き継ぐDNAを刺激するために、「次の時代に何を残すのか」、これからしばらくこの「問いかけ」を続けることが必要である。

(日本大学理工学部 教授)

## □ News Letters

## 事業報告・活動報告 □

### ■第4回 麹町塾（国土について語る会）

（平成21年8月5日） 参加者 13名

野々村邦夫（財）日本地図センター理事長により、『地図で見る』と題して、東京はじめ各地の地図にあらわされる地域構造の変化などにつき、多数の例示をされた。

- ・東京の山の手（台地）は坂を、下町（低地）は橋を覚えるとわかりやすい。

—渋谷の宇田川、渋谷川と地上3階の銀座線や東横地下街の関係

—田園調布の街構造

—亀戸のマイナス3.8m地帯

—地下水法、ビル用水法など、都条例の変遷

- ・江戸・東京の歴史で、10万人規模での死者が出た3大災難は、明暦の振袖火事（1657）、関東大震災（1927）、第二次大戦空襲（1944）の3件あって、都市構造を大きく変えた。

—上野広小路、新宿御苑など

—広島の前通りやソウルの16車線道路も同様。

- ・地方には昔のほうが大きな都市や廃村もある。—近年では夕張

・地方の行政区分は河川の分水界（分水嶺）による例が多い。—千歳、安芸高田、石生

・平成の大合併によって奇妙な地名が生まれたが、近年の駅名にも奇妙な名前が多い。

—桐生駅と西桐生駅、品川駅と北品川駅、白楽駅と東白楽駅、さくら市桜ヶ丘、バス停だが多摩丘陵

—地形の名がつく古戦場 関ヶ原、桶狭間、手取川、石橋山、川中島

続いて、参加者からも地図とその社会背景についての事例が紹介された。

- ・フランスでは地図は軍事的利用のために優れたものが作られてきたが、そこから景観に対する概念もでてきた。

・築城時の石垣には、急ぎ築城した名古屋城では分担された各地の異なる種類の石が積み、江戸城では火に弱い御影石ではなく、真鶴・東伊豆から小松石（安山岩）が運ばれた。

- ・明治中期は、公共投資の半分程度は鉄道で、民鉄が多かったが、そのルートは招聘した外国人技師が測量技術を使いながら、いい地形のところを通して。

これほどの財源として、大名から召し上げた森林や、銅、生糸、種子などの外貨かせぎによるところが大きい。国債を発行できたのは欧州での万博で日本への信用が高まったことが大きい。

- ・海から見た国土も重要で、松本健一著『海岸線の歴史』は好著。

(文責 水野)

## ■第5回 麴町塾（国土について語る会）

（平成9月30日） 参加者 14名

石田東生 筑波大学教授により、『FDRとシーニックビュー』と題して、1930年代の大恐慌にあった米国でフランクリンローズベルト大統領によるニューディール政策で実施された様々な国土づくりや、日本でも近年の観光・景観づくりにむけていくつかの方策が紹介された。

・日本ではニューディール政策=TVAと思われがちだが、Blue Ridge Parkwayなど景観に重きを置いた大規模な公園や道路も建設され、今や目を見張る観光施設となっている。

道路はサービス提供という考え方が、当時から出てきており、たとえばミネソタに本部を置く全米のScenic Conference本部は、現在も景観保全面で大きな役割をもっている。

恐慌期にはあっても、30億本規模の植樹や、農地保全のための休耕補助など、長期的視点に立った国土づくりもなされた。

経済的にみれば、短期的には25%にも達していた失業対策の面があったが、CCC（Civilian Conservation Corps）による500万人の若者の人材教育は現代の日本にも参考になるか。

・最近の日本では、耕作放棄地が多くなり、農地が保全されないだけでなく、美瑛、富良野など美しい地域が衰え、遠くから見る一級の景観も近くでは最悪の事例が増えている。

そのような中で、105ルートまで登録された日本風景街道は市民プロデューサーも交えた、コミュニケーション型行政として期待され、その一つが熊野古道。

ほかにも出雲神仏霊場、長崎さるく博（2006）などは粘り強い担い手によるコミュニケーション型行政の好例。

参加者との意見交換では、

・CCCと近い政策は、ヒットラー時代のアウトバーンや都市づくりや、日本の満蒙開拓など、ナショナリズムを勢いづける状況下にも見られ、ややもすると軍事的側面もある。

・日本の国道が大きく遅れているひとつは、わかりにくい国道番号づけで、高速道路にもない。

・東京の公園づくりでは、大丸有からNTT本社あたりまでのセントラルパーク構想や、外堀に沿っての公園化など、まだやれることはある。

・最近、農業土木学会が生き生きとしてきたのに比し、土木学会はもっと未来志向をめざすべきだ。

（文責 水野）

## ■2009年9月 計交研・当て塾共催セミナー（第Ⅸ講・第8回）

●日時：平成21年9月9日（水）17:00～20:00

●場所：計画・交通研究会会議室

●講師・演題

①「当て塾」塾長 鈴木忠義 先生

今後の共催セミナーの進め方

②（有）オフィス・ネオ 主任 高橋 章 氏

都庁展望室の再整備について

●参加者：17名（うち計交研関係7名）

〔講義概要〕

9月からの共催セミナーは、以下の3本立ての内容で進めていく。

◇1「観光原論研究」の深化

ーテキストからテキスト・ブックへー

「観光原論研究」の構成案が完成したその続きとして、内容を個別に深化させていく。

今後の講義では、「観光原論研究」の構成案を“観光原論の『テキスト』”と呼ぶ。（「観光原論研究」の構成案を毎回持参して頂く。）

◇2「フォーラム当て」

従来通り、参加者のうち1名が調査・研究・事例等の報告を行い、全員で討論する。

◇3「当てのコラム」

新しい試みとして、新聞、雑誌、テレビなどの記事を題材として拾い上げ、各自が自由にコラムニスト（columnist）になって報告する。以下は、例題。

記事：「待機児童約6,000人増、東京が最多ー

9県ではゼロ」 読売新聞09.9.8（火）

コメント：国土論における一極集中の欠点

## ◆観光原論研究の深化(その1) : テキストP.7

### 1.4 観光の多様性と種類と特徴

桑原武夫先生の「文学入門」の“文学”を“観光”に入れ替えると、観光がいかに文学に類似しているかが分かる。

文学作品の読み方には、筋だけを追う読み方や、描写を一語一句解釈する読み方などがある。観光も、車でざっと通り過ぎる旅行や、丹念に見物して歩く旅など、色々な仕方がある。このとき、文学作品では“読み方とセンス”と言われ、観光では“旅の仕方とセンス”となる。センスとは、①感覚・意識 ②思慮・分別 ③意味・意義ということである。

これより、“旅は個性による”ということになり、“人生は旅行術を身につけること”が幸福につながる。

思慮・分別とは判断力で、旅行や読書などによる一般教養によって身に付く。

観光の基本式：感動(i) = 動機付け×観光対象(mO) + 準備×条件(pC) + 蓄積(s) 中の蓄積(s)がセンスとなる。このため、観光は十人十色で、多様性と特徴が出てくる。

センスは、教育により身につく。美術品や骨董品は本物を見ることで目を養うように、観光では、幼児教育と環境、特に、体験教育が大切である。“体験こそ理解”と言われるように、遊びや“ごっこ”の中で勉強していく。

## ◆報告(フォーラム当て2009)・4◆(高橋章)

1990年に竣工し、1991年に供用を開始した都庁本庁舎は、高さ243mと当時日本最高の超高層ビルで、その最上階の無料展望室は、新たな観光スポットとして多くの眺望客が来場した。しかし、オープン当初は249万人を記録した来室者数は年々減少を続け、1999年には135万人へと半減したが、その後展望室のリニューアルや都庁広報活動により2008年には186万人まで回復した。一方、2007年に「民間資金等の活用による公共施設等の整備等の促進に関する法律」が改正され、都庁本庁舎についても有効活用のため、営利事業への賃貸が可能になった。そこで、都庁展望室を、より魅力的な集客施設として収益を上げることを目的として、

民間の創意と工夫を活用して観光施策と連動した利活用を行う可能性について検討したものである。

[報告目次]

1. 都庁展望室の概要
2. 都庁展望室来室者の特性
  - (1) 来室者数の推移
  - (2) 来室者の構成
3. 都庁展望室のリニューアル

(文責：「当て塾」事務局 野倉 淳)

## ■2009年9月 計交研・当て塾共催セミナー (第Ⅸ講・第9回)

●日時：平成21年9月24日(木)17:00~20:00

●場所：計画・交通研究会会議室

●講師・演題

①「当て塾」塾長 鈴木忠義 先生

観光原論研究の深化 その2

②(株)要松園コーポレーション 代表 土沼隆雄 氏

庭園は文化の表看板になれるか?

(新潟市・旧斎藤家夏の別邸庭園の保全)

●参加者：20名(うち計交研関係8名)

[講義概要]

## ◆観光原論研究の深化(その2) : テキストP.4

### 1.1 現象論<仮説として 観光>

#### (1) 構成

「観光とは」と簡単には定義できないことから、具体的な現象を示す。その構成は、観光に関わりが深い「時代の断片」の解説と、写真と図表による「現象」の紹介である。

時代の断片と現象は、産業革命、戦中・戦後(平和と治安)、メディアの発展など、古今東西のものを扱い、20項目程度を示したい。

#### (2) 写真の説明

以下のようなものを、写真で説明する。

- ・イベントー万博(ロンドン、パリ、大阪)
- ・レジャー施設(ディズニーランド、チボリ公園)
- ・リゾート(避暑・避寒、スキー、ビーチなど)
- ・温泉(療養、保養、休養)

#### (3) 観光の進化

旅、観光旅行、娯楽などと広がる観光の質的变化、大衆化による量的変化を示す。

質：旅、旅行、スポーツ、レクリエーション、

娯楽、保養・・・

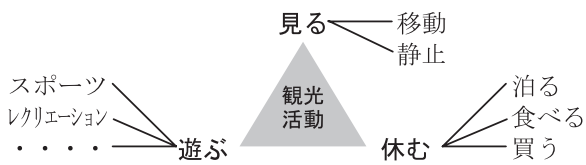
量： 大衆化、マスツーリズム

#### (4) 観光対象

観光対象である地域・地区・施設が、マスレジャーを背景に大型化したことなどを示す。

#### (5) 基本的活動

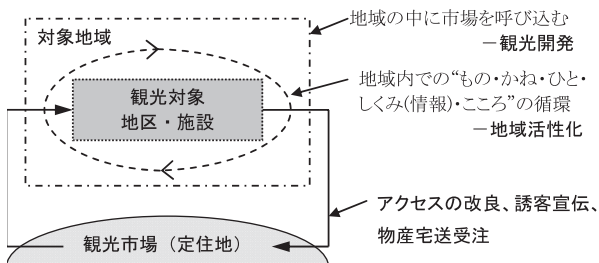
観光の基本的な活動は、「見る」「遊ぶ」「休む」であり、それらから枝分かれして多様な観光活動の発展が示される。この中で、買い物は観光行動の重要な要素であり、空港の到着ロビーの風景がその典型として示される。



### 1.2 観光の成立とその構成

関連する言葉を適切に定義する。例えば、観光市場は、観光者の定住地である。市場性とは、人口と基幹交通である。資源性とは、観光地の魅力である。

#### ツーリズムモデル：基本は市場性と資源性



#### ◆報告(フォーラム当て2009)・5◆(土沼隆雄)

新潟市にある「旧斎藤家夏の別邸庭園」は、個人所有の庭園が市民運動により市の所有となり、《個》の庭から《公》の庭として生まれ変わろうとしており、今後、保全や利活用に関する調査・検討が行われる予定である。

このとき、“庭園の文化財的価値とは”といった従来型の議論だけが展開されて、心から庭園を楽しもうとする人が傍らに追いやられてしまうことが懸念される。そこで、庭園が現代社会の中で本質(原論)を失わずに継承されていくために、①市民の財産としてどのように位置づけるか、②まちづくりの中でどのように活かすか、という2点について問題提起を行い、庭園と我々人間との本当の関係とは何か、それを結ぶ手段としての庭園の再発見などについて考えてみた。

[報告目次]

1. 今までの経過
2. 庭園の概略
3. 問題提起Ⅰ：庭園の位置づけ
4. 問題提起Ⅱ：まちづくりの視点

(文責：「当て塾」事務局 野倉 淳)

■一般社団法人設立記念の特別講演会

すでに会報、ホームページ等でお知らせしましたとおり、当研究会は任意団体としてのすべての事業活動を承継して、本年9月1日から一般社団法人としての事業を開始しております。従前より恒例として行いました、年末の特別講演会と懇親会も、一般社団法人設立記念として同様に予定しておりますが、本年は併せて、新たに設置されました評議員会も、同日の直前に開催する予定です。ご出欠をうかがうご案内は、11月に入りまして差し上げます。

日時：平成21年12月8日（火）  
 評議員会（新たな体制の説明等） 16:15 - 16:50  
 特別講演会 17:00 - 18:00  
 ご講演者：JR東海旅客鉄道（株）  
 執行役員 白國紀行 様  
 演 題：超電導リニアと東海道新幹線バイパス  
 懇親会 18:10 - 20:00  
 場所 主婦会館プラザエフ（四谷駅前）

■訃報

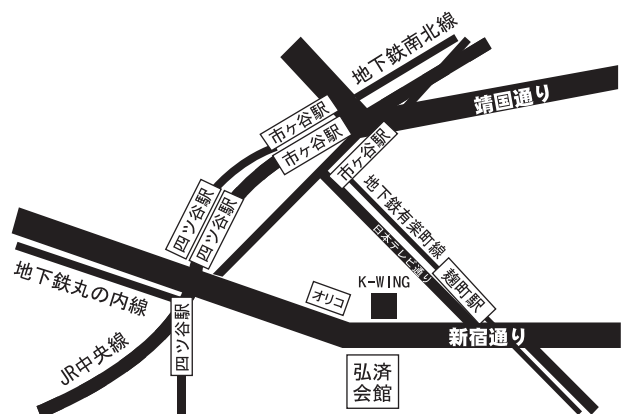
当研究会のさまざまな事業活動や幹事会において、要として多大なご尽力をいただいていた上田孝行東大教授におかれましては、9月19日未明、肺動脈血栓症のため急逝されました。享年45歳でした。

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

（社）計画・交通研究会

会長 森地 茂  
 副会長 石田 東生  
 副会長 家田 仁  
 副会長 屋井 鉄雄  
 事務局長 水野 高信  
 会報編集委員長 中井 祐

〒102-0083  
 東京都千代田区麹町5-2-1 K-WING 6F  
 TEL=03-3265-1774  
 FAX=03-3221-5489  
 E-Mail=  
 jimukyoku@keikaku-kotsu.org  
 Homepage =  
 http://www.keikaku-kotsu.org/



（社）計画・交通研究会案内図

交通

JR中央線四谷駅麹町口から徒歩6分/地下鉄丸の内線四谷駅徒歩6分/南北線四谷駅徒歩7分/有楽町線麹町駅4番出口より4分  
 弘済会館前の大きなビル（オリコ）の右隣、1階にドラッグストア（クスリ）の入った小さなビル。